

作品集

〈八月六日〉を描く



文化評論出版

作品集

∧八月六日∨を描く

作品集　／＼八月六日　＼を描く

発行　―　昭和四十六年七月一五日再版発行

□　□　□

定価　―　七八〇円

□　□　□

発行者　―　荒木妙子

発行所　―　文化評論出版株式会社

広島市観音本町二丁目九―一・電話（〇八二二）三二一六二八二

東京都港区六本木三丁目六―九・電話（〇三）五八四―七六六八

印刷所　―　大日本印刷株式会社

（落丁・乱丁はおとりかえします）

はしがき

井 伏 鱒 二

「広島のこと」のような大事件は文学作品の対象とするには巨大にすぎる。長篇大作でその全貌を捉へようとしても、または二作三作と重ねてみても手にあまる素材である。事件は前例のなかったことでもあり、突如として起ったことでもあり、しかも一瞬にして事態を決したことでもあるし、とても空想に頼って綴り得る対象でない。正確に書こうとすればするほど筆が渋る筈だ。被爆体験者にしても全貌は捉へ難いのではないだろうか。たとえば前例の多かった長年にわたる戦争にしても、来る日も来る日も大陸の奥地を行軍して終戦を迎えた兵隊は、「戦争とは絶域の地を果てしなく歩くことだ」という実感を持つたろう。サイパン島で洞穴を掘り続けた末に飢餓に倒れる兵隊は、「戦争とは絶海の孤島

で穴堀りする兵卒を餓死させるものだ」という実感を持つだろう。体験の上から大事件について一個人の実感を語ろうとすれば見解が局部的になってしまう。盲人が象を撫でるようなものである。繰返して云うが、その意味からして「広島のこと」のような言語に絶する悲惨な大事件は、たとえ体験者であっても一個人で書き得る対象とは云われまい。原爆小説を発表する良識的な一つの方法は、多数の体験者が各自の見聞を忠実に書き綴り、それを互に検討した上で一つにまとめて出版社に渡すことではないかと思う。それが最良の方法かどうかはともかくも、「原爆はもう御免だ。実相はこれだ」という思いを読者に訴えるには一つの方法だろう。（被爆を体験しない第三者が書く場合は、多勢の体験者から取材するより他はないが、これは体験者から見れば上の空で書いたような作品になるかも知からない。昇華が不足して、悪くしたらルポルタージュ風の雑文にしかないのだ。私自身がその例証作を持っている）だから出版社としては多くの被爆体験者に執筆を頼むし、本書のようにアンソロジーの形式にするのが良策ではないだろうか。いづれにしても本書の出版企画には原爆を詛ふ気持が強度に籠っているようだ。あの惨禍は二度と繰返してもらいたくない。この念願でこれを編纂したのであると思う。

目

次

はしがき 井伏 鱒二…………… 1

夏の花 原 民喜…………… 9

炎の日 廣中 俊雄…………… 23

半人間 大田 洋子…………… 69

雲の記憶 石田 耕治…………… 115

火の踊り 小久保 均…………… 141

過ぐる夏に 岩崎清一郎…………… 185

重い車 文沢 隆一……………209

赤と黒の喪章 佃 實夫……………241

あとがき

原民喜と大田洋子さんのこと……………313

「炎の日」と私……………318

現在を否定する内なる過去のこと……………323

私の紀元元年……………335

ヒロシマ・その虚像……………341

原爆と私……………348

「赤黒との喪章」あとがき……………353

解説 松元 寛……………359

作品集

∧八月六日∨を描く

夏 の 花

原
民
喜

私は街に出て花を買ふと、妻の墓を訪れようと思つた。ポケットには仏壇からとり出した線香が一束あつた。八月十五日は妻にとつて初盆にあたるとののだが、それまでこのふるさとの街が無事かどうかは疑はしかつた。恰度、休電日ではあつたが、朝から花をもつて街を歩いている男は、私のほかに見あたらなかつた。その花は何といふ名称なのか知らないが、黄色の小瓣の可憐な野趣を帯び、いかにも夏の花らしかつた。

炎天に曝されてゐる墓石に水を打ち、その花を二つに分けて左右の花たてに差すと、墓のおもてが何となく清々しくなつたやうで、私はしばらく花と石に視入つた。この墓の下には妻ばかりか、父母の骨も納つてゐるのだつた。持つて来た線香にマッチをつけ、黙礼を済ますと私はかたはらの井戸で水を呑んだ。それから、饒津公園の方を廻つて家に戻つたのであるが、その日も、その翌日も、私のポケットは線香の匂ひがしみこんでゐた。原子爆弾に襲はれたのは、その翌々日のことであつた。

私は厠かほやにゐたため一命を拾つた。八月六日の朝、私は八時頃床を離れた。前の晩二回も空襲警報が出、何事もなかつたので、夜明前には服を全部脱いで、久し振りに寝間着に着替へて睡つた。それで、起き出した時もパンツ一つで

あつた。妹はこの姿をみると、朝寝したことをぶつぶつ難じてゐたが、私は黙つて便所へ這入つた。

それから何秒後のことかはつきりしないが、突然、私の頭上に一撃が加へられ、眼の前に暗闇がすべり墜ちた。私は思はずうわあと喚き、頭に手をやつて立上つた。嵐のやうなものの墜落する音のほかに真暗でなにもわからない。手探りで扉を開けると、縁側があつた。その時まで、私はうわあといふ自分の声を、ざあーといふもの音の中にはつきり耳にきき、眼が見えないので悶えてゐた。しかし、縁側に出ると、間もなく薄らあかりの中に破壊された家屋が浮び出し、気持もはつきりして来た。

それはひどく厭な夢のなかの出来事に似てゐた。最初、私の頭に一撃が加へられ眼が見えなくなつた時、私は自分が斃れてはゐないことを知つた。それから、ひどく面倒なことになつたと思ひ腹立たしかつた。そして、うわあと叫んでゐる自分の声が何だか別人の声のやうに耳にきこえた。しかし、あたりの様子が朧ながら目に見えだして来ると、今度は惨劇の舞台の中に立つてゐるやうな気持であつた。たしか、かういふ光景は映画などで見たことがある。濛々と煙る砂塵のむかうに青い空間が見え、つづいてその空間の数が増えた。壁の脱落した処や、思ひがけない方向から明りが射して来る。畳の飛散つた坐板の上をそろそろ

歩いて行くと、向うから凄さまじい勢で妹が駆けつけて来た。

「やられなかった、やられなかったの、大丈夫」と妹は叫び、「眼から血が出てゐる、早く洗ひなさい」と台所の流しに水道が出てゐることを教へてくれた。

私は自分が全裸体であることを気付いたので、「とにかく着るものはないか」と妹を顧ると、妹は壊れ残った押入からうまくパンツを取出してくれた。そこへ誰か奇妙な身振りで闖入して来たものがあつた。顔を血だらけにし、シャツ一枚の男は工場の人であつたが、私の姿を見ると、「あなたは無事でよかつたですな」と云ひ捨て、「電話、電話、電話をかけなきゃ」と呟きながら忙しうに何処かへ立去つた。

到るところに隙間が出来、建具も畳も散乱した家は、柱と闕ばかりがはつきりと現れ、しばし奇異な沈黙をつづけてゐた。これがこの家の最後の姿らしかつた。後で知つたところに依ると、この地域では大概の家がべしやんにこに倒壊したらしいのに、この家は二階も墜ちず床もしつかりしてゐた。余程しつかりした普請だつたのだらう。五十年前、神経質な父が建てさせたものであつた。

私は錯乱した畳や襖の上を踏越えて、身につけるものを探した。上着はすぐに見附かつたがずぼんを求めてあちこ

ちしてゐると、滅茶苦茶に散らかつた品物の位置と姿が、ふと忙しい眼に留るのであつた。昨夜まで読みかかりの本が頁をまくれて落ちてゐる。長押から墜落した額が殺氣を帯びて小床を塞いでゐる。ふと、何処からともなく、水筒が見つかり、つづいて帽子が出て来た。ずぼんは見あたらないので今度は足に穿くものを探してゐた。

その時、座敷の縁側に事務室のKが現れた。Kは私の姿を認めると、

「ああ、やられた、助けてえ」と悲痛な声で呼びかけ、そこへ、べつたり坐り込んでしまつた。額に少し血が噴出てをり、眼は涙ぐんでゐた。

「何処をやられたのです」と訊ねると、「膝ちゃ」とそこを押へながら皺の多い蒼顔を歪める。

私は側にあつた布切れを彼に与へておき、靴下を二枚重ねて足に穿いた。

「あ、煙が出だした、逃げよう、連れて逃げてくれ」とKは頻りに私を急かし出す。この私よりかなり年上の、しかし平素ははるかに元氣なKも、どういふものか少し顫動氣味であつた。

縁側から見渡せば、一めんに崩れ落ちた家屋の塊があり、やや彼方の鉄筋コンクリートの建物が残つてゐるほか、目標になるものも無い。庭の土塀のくつがへつた脇に、大

きな楓の幹が中途からポツタリ折られて、梢を^{てうづばち}手洗鉢の上に投出してゐる。ふと、Kは防空壕のところへ屈み、

「ここで、頑張らうか、水槽もあるし」と変なことを云ふ。

「いや、川へ行きませう」と私が云ふと、Kは不審さうに、

「川？川はどちらへ行つたら出られるのだったかしら」と囁く。

とにかく、逃げるにしてもまだ準備が整はなかつた。私は押入から寝間着をとり出し彼に手渡し、更に縁側の暗幕を引裂いた。座蒲団も拾つた。縁側の畳をはねくり返してみると、持逃げ用の雑糞が出て来た。私は吻としてそのカバンを肩にかけた。隣の製薬会社の倉庫から赤い小さな焰の姿が見えだした。いよいよ逃げだす時機であつた。私は最後にポツクリ折れ曲つた楓の側を踏越えて出て行つた。

その大きな楓は昔から庭の隅にあつて、私の少年時代、夢想の対象となつてゐた樹木である。それが、この春久し振りに郷里の家に帰つて暮すやうになつてからは、どうも、もう昔のやうな潤ひのある姿が、この樹木からさへ汲みとれないのを、つくづく私は奇異に思つてゐた。不思議なのは、この郷里全体が、やはらかい自然の調子を喪つて、何か残酷な無機物の集合のやうに感じられることであつた。私は庭に面した座敷に這入つて行つたに、^{アッ}「アッシャ家

の崩壊」といふ言葉がひとりでに浮んでゐた。

Kと私とは崩壊した家屋の上を乗越え、障害物を除けながら、はじめはそろそろと進んで行く。そのうちに、足許が平坦な地面に達し、道路に出てゐることがわかる。すると今度は急ぎ足でとつと道の中ほどを歩く。ペしやんこになつた建物の蔭からふと、「をちさん」と喚く声がする。振り返ると、顔を血だらけにした女が泣きながらこちらへ歩いて来る。「助けてえ」と彼女は暫えきつた相で一生涯懸命ついて来る。暫く行くと、路上に立はだかつて、「家が焼ける、家が焼ける」と子供のやうに泣喚いてゐる老女と出逢つた。煙は崩れた家屋のあちこちから立昇つてゐたが、急に焰の息が烈しく吹きまくつてゐるところへ来る。走つて、そこを過ぎると、道はまた平坦となり、そして柴橋の袂に私達は来てゐた。ここには避難者がぞくぞく^{いじ}蛸集してゐた。「元氣な人はバケツで火を消せ」と誰かが橋の上に頑張つてゐる。私は泉邸の藪の方へ道をとり、そして、ここでKとははぐれてしまつた。

その竹藪は薙ぎ倒され、逃げて行く人の勢で、径が自然と拓かれてゐた。見上げる樹木もおほかた中空で削ぎとられてをり、川に添つた、この由緒ある名園も、今は傷だらけの姿であつた。ふと、灌木の側にだらりと豊かな肢体を

投出して蹲つてゐる中年の婦人の顔があつた。魂の抜けはてたその顔は、見てゐるうちに何か感染しさうになるのであつた。こんな顔に出喰はしたのは、これがはじめてであつた。が、それよりもつと奇怪な顔に、その後私はかぎりなく出喰はさねばならなかつた。

川岸に出る藪のところ、私は学徒の一塊と出逢つた。

工場から逃げ出した彼女達は一やうに軽い負傷をしてゐたが、いま眼の前に出現した出来事の新鮮さに戦きながら、却つて元氣さうに喋り合つてゐた。そこへ長兄の姿が現れた。シャツ一枚で、片手にビール瓶を持ち、まづ異状なさうであつた。向岸も見渡すかぎり建物は崩れ、電柱の残つてゐるほか、もう火の手が廻つてゐた。私は狭い川岸の徑へ腰を下ろすと、しかし、もう大丈夫だといふ氣持がした。長い間脅かされてゐたものが、遂に來たるべきものが、來たのだつた。さばさばした氣持で、私は自分が生きながらへてゐることを顧みた。かねて、二つに一つは助からないかもしれないと思つてゐたのだが、今、ふと己が生きていることと、その意味が、はつと私を弾いた。

このことを書きのこさねばならない、と、私は心に呟いた。けれども、その時はまだ、私はこの空襲の真相を殆ど知つてはゐなかつたのである。

対岸の火事が勢を増して來た。こちら側まで火照りが放射して來るので、満潮の川水に座蒲団を浸しては頭にかむる。そのうち、誰かが「空襲」と叫ぶ。「白いものを着たものは木蔭へ隠れよ」といふ声に、皆はぞろぞろ藪の奥へ匍つて行く。陽は燦々と降り灑ぎ藪の向うも、どうやら火が燃えてゐる様子だ。暫く息を殺してゐたが、何事もなささうなので、また川の方へ出て來ると、向岸の火事は更に衰へてゐない。熱風が頭上を走り、黒煙が川の中ほどまで煽られて來る。その時、急に頭上の空が暗黒と化したかと思ふと、沛然として大粒の雨が落ちて來た。雨はあたりの火照りを稍々鎮めてくれたが、暫くすると、またからりと晴れた天氣にもどつた。対岸の火事はまだつづいてゐた。今、こちらの岸には長兄と妹とそれから近所の見知つた顔が二つ三つ見受けられたが、みんなは寄り集つて、てんでに今朝の出来事を語り合ふのであつた。

あの時、兄は事務室のテーブルにゐたが、庭さきに閃光が走ると間もなく、一間あまり跳ね飛ばされ、家屋の下敷になつて暫く藻掻いた。やがて隙間があるのに氣つき、そこから這ひ出すと、工場の方では、学徒が救ひを求めて喚叫してゐる――兄はそれを救ひ出すのに大奮闘した。妹は玄關のところで光線を見て、大急ぎで階段の下に身を潜めたため、あまり負傷を受けなかつた。みんな、はじめ自分

の家だけ爆撃されたものと思ひ込んで、外に出てみると、何処も一樣にやられてゐるのに啞然とした。それに、地上の家屋は崩壊してゐながら、爆弾らしい穴があいてゐないのも不思議であつた。あれは警戒警報が解除になつて間もなくのことであつた。ピカッと光つたものがあり、マグネシウムを燃すようなシューッといふ軽い音とともに一瞬さつと足もとが回転し、……それはまるで魔術のやうであつた、と妹は戦々ながら語るのであつた。

向岸の火が鎮まりかけると、こちらの庭園の木立が燃えだしたといふ声がある。かすかな煙が後の藪の高い空に見えそめてゐた。川の水は満潮の儘まだ退かうとしない。私は石崖を伝つて、水際のところへ降りて行つてみた。すると、すぐ足許のところを、白木の大きな函が流れてをり、函から喰み出た玉葱があたりに漂つていた。私は函を引寄せ、中から玉葱を掴み出しては、岸の方へ手渡した。これは上流の鉄橋で貨車が顛覆し、そこからこの函は放り出されて漂つて来たものであつた。私が玉葱を拾つてみると、「助けてえ」といふ声がきこえた。木片に取縋りながら少女が一人、川の中ほどを浮き沈みして流されて来る。私は大きな材木を選ぶとそれを押すやうにして泳いで行つた。久しく泳いだこともない私ではあつたが、思ったより簡単に相手を救ひ出すことが出来た。

暫く鎮まつてゐた向岸の火が、何時の間にかまた狂ひ出した。今度は赤い火の中にどす黒い煙が見え、その黒い塊が猛然と抜つて行き、見る見るうちに焰の熱度が増すやうであつた。が、その無気味な火もやがて燃え尽すだけ燃えると、空虚な残骸の姿となつてゐた。その時である。私は川下の方の空に、恰度川の中ほどにあたつて、物凄く透明な空氣の層が揺れながら移動して来るのに氣づいた。龍巻だ、と思ふうちに、烈しい風は既に頭上をよぎらうとしてゐた。まはりの草木がごとごとく慄へ、と見ると、その儘引抜かれて空に攫はれて行く数多の樹木があつた。空を舞ひ狂ふ樹木は矢のやうな勢で、混濁の中に墜ちて行く。私はこの時、あたりの空氣がどんな色彩であつたか、はつきり覚えてはゐない。が、恐らく、ひどく陰惨な、地獄絵巻の緑の微光につつまれてゐたのではないかとおもへるのである。

この龍巻が過ぎると、もう夕方に近い空の氣配が感じられてゐたが、今迄姿を見せなかつた二番目の兄が、ふとこちらにやつて来たのであつた。顔にさつと薄墨色の跡があり、背のシャツも引裂かれてゐる。その海水浴で日焦した位の皮膚の跡が、後には化膿を伴ふ火傷となり、数ヶ月も治療を要したのだが、この時はまだこの兄もなかなか元気であつた。彼は自宅へ用事で帰つたとたん、上空に小さな